

ラテンアメリカ都市物語

＝第17回＝

サンサルバドルの魅力 を発見しましょう

マルタ・リディア・セラヤンディア・シスネロス

今回、『ラテンアメリカ時報』に、エルサルバドル共和国の首都サンサルバドル市が取り上げられたことを大変嬉しく思います。



写真1：San Salvador サンサルバドル市中心部 中央 白い建物が大聖堂
(写真はすべて駐日エルサルバドル大使館提供)

サンサルバドルとは

サンサルバドル市は標高 800m から 1,000m のところにあり、一年を通して過ごしやすい気候を有します。中米のなかでもっとも人口密度の高い都市の一つです。在住の方や訪れる人々が町中を体験すると活気に溢れる場所であるということを実感できるでしょう。

町や都市を構成する重要な要素として建物、道路等ハード的な側面がありますが、ソフト的な側面もあり、それは住民です。活気の原因として人々の懸命さ、様々な困難の存在にもかかわらず明るく前向きに生きて、ホスピタリティーを持って接するエルサルバドル人に逢うことができます。

都市名のサンサルバドルと国名のエルサルバドルに着目すると、キリスト教カトリックで救世主（イエス・キリストを指す）の意味があります。この名

前の背景には 1456 年十字軍がオスマン帝国に勝利したベルグラドの戦いのときに、イエス様が世界を救われたという当時のローマ教皇の宣言があります。それによってサルバドル (Salvador) を使った地名が世界各地に現れました。その後、大航海時代にコロンブスが最初に上陸したと言われ、アメリカ大陸“発見”のきっかけになったサンサルバドル島などもその例です。

サンサルバドル市の最大の祭り 8月6日には「イエスの変容 (Transfiguración de Jesús)」が祝われ、毎年盛大に行われます。祝日はサンサルバドル市にとどまらず全国的に一週間程、学校も政府関係施設など休みになります。この期間は8月に行われるということでスペイン語の「8月祭り (Fiestas agostinas)」と呼びます。この時期は国民の主食であるトウモロコシの収穫と重なり、あちらこちらで「トウモロコシを食べる会」があります。アトラダ (atolada) は、新鮮なトウモロコシを原料にスープ



写真2：Teatro Nacional 国立劇場 民族舞踊が演じられている

のようなアトール (Atol) やいろいろなトウモロコシ料理を作り一緒に食べる家族や友人の集まりです。ここで見られるのはスペインの食文化が強く残っている一方で、エルサルバドルには古来より存在する文化も人々の暮らしに残っているということです。

サンサルバドルの歴史

サンサルバドル市はいつ建設されたかですが、1525年にスペインから征服者アルバラドがやって来てサンサルバドルと名付ける町“villa”を植民地として建設するまでは、地元の人々からはクスカトラン“Cuscatlán”と呼ばれていました。現在でも首都圏に新と旧クスカトランと呼ばれている市があります。1445年に今の場所に定まりました。サンサルバドル市の紋章にもその創設の年が記されています。

スペイン植民地時代にはグアテマラ市に中米全体のスペイン王国の副王領府が設置されていましたが、独立運動はサンサルバドルから始められたと伝わっています。正式に中米諸国の独立は1821年でしたが、サンサルバドルでは複数の独立運動が行われていました。特に1811年に行われた独立運動はよく知られています。その第一回の試みが失敗に終わりましたが、これによってサンサルバドルは当時から独立運動が活発な町、独立を志す積極的な人々が暮らしていたということをお話していると言えるのではないのでしょうか。歴史の流れの中でサンサルバドル市民の性質が現れるもう一つの例は、1821年にメキシコがスペインから独立軍を率いたイトゥルビーデ將軍がアグスティン1世としてメキシコ皇帝の地位に就いた時、グアテマラに総督府を置かれた中米諸国をメキシコに併合するとの提案がありました。中米諸国のほとんどはその圧力に屈して同意しましたが、エルサルバドルだけは拒否したためにメキシコやグアテマラから軍事的な圧力を受けました。勇敢なエルサルバドル人はそれに抵抗しましたが、ついにメキシコ軍がサンサルバドルに迫ってきました。ところがアグスティン1世が1823年に退位し帝国が倒れたため、サンサルバドル郊外に駐留していたメキシコ軍が引き上げることとなりました。この場所には今も“Mejicanos (メキシコ人)”と呼ばれる正式な自治会があります。近代歴史においても、やはり上述のサンサルバドル市の「ソフトな側面」の性質が様々な場面において示されてきたのです。

地震とハリケーン災害

サンサルバドルは大きな地震が起きてよく揺れることから“Valle de las Hamacas (ハンモックの谷)”として知られます。国全体に火山が多く、太平洋プレートにあることもあって、昔から度々地震に遭ってきました。また水害にも見舞われてきました。日本も火山が多く自然災害が毎年のように起きるといふ共通点をもっていることから、エルサルバドルと日本との協力関係においては、防災、減災、耐震といった取り組みも重要なテーマとなっています。つい最近のことですが、本年6月にまたエルサルバドルで全国的に、特にサンサルバドル市周辺に大きな被害をもたらした2つの連続的に起きた『アマンダ』と『クリストバル』の大集中豪雨がありました。新型コロナウイルスの感染が拡大しているまっただ中に起きて二重災害となりました。



写真3: Torre Futura 近代的なビルと緑の多い市内と周辺

サンサルバドルの魅力ある見どころ

クスカトラン公園は緑が多く博物館もあります。人気な公園はその他にこども公園、マキリシュワット公園 (マキリシュワットは国木です)。ピンク色の花が咲く時期に木全体が桜のように見えることから、日本の方たちから「エルサルバドルさくら」と呼ばれることもあります。



写真4: Teatro Nacional 右がサンサルバドル大聖堂、左は国立劇場

「サンサルバドルは首都でありながら、町にはたくさんの植物がみられますね」と数年前に訪れた日本人の庭師の方からコメントいただきました。その方は世界の様々な国と地域を訪問された経験があり、「各国の町を見ると都市開発によってコンクリートやアスファルトなどが目立ち、木や花が見られなくなっています」とおっしゃったのです。その印象を促したのは、サンサルバドル国際空港に到着して市内に入るまでの間にも、たくさんの緑がみられて安心した気持ちを感じられるとも話されていました。

サンサルバドル市、そしてエルサルバドルの国を代表するモニュメントは、「聖なる救世主のモニュメント」「モヌメント・アル・ディビノ・サルバドル・ムンド」です。

文化的な施設として国立博物館、美術館“MARTE - Museo de Arte”、国立劇場“Teatro Nacional”、テアトロ・プレシデンテが代表的です。

また、エルサルバドルの教育機関の中心都市となっています。以前はエルサルバドル自治大学（創立1841年）とUCA（設立1965年）、中米ホセ・シメオン・カニヤス大学だけでしたが、1970年代後半には政治的不安定によってエルサルバドル大学が一時閉鎖されました。理工系のアルバート・アインシュタイン大学が1973年に、1977年には総合大学のホセ・マティアス・デルガド大学が設立され、1982年の内戦終結前後にはさらにいろいろな私立大学が設立されました。

救世主イエスを祀る大聖堂「カテドラル・メトロポリターナ」（1880年設立）もサンサルバドル市の有名な建築物です。多くの歴史の舞台になりました



写真5：Monumento al Divino Salvador del Mundo 救世主のモニュメント

が、現在見ておくべき所としては、内戦の最中1980年3月に暗殺されたオスカル・アルヌルフォ・ロメロ大司教の Mausoleo（お墓）があります。当時大司教だった彼の愛称はモンセニョール・ロメロですが、2015年にサンサルバドル市で盛大に列福式が行われ、2018年10月にフランシスコ教皇によりバチカンで列聖（カトリック教会で福者がさらに聖人に公認）にされました。「声なき人々の声」となって、人権侵害を最後まで勇気をもって訴え続けられた平和を愛するモンセニョール・ロメロの世界への貢献が認められた形になりました。

エルサルバドルと日本の長い絆

サンサルバドル市は首都ですから、当然ながら国の主要な施設があります。大統領府、国会、最高裁判所、各省といった政府機関をはじめ、主要企業の本社が置かれています。例えば、日本との関係の中で真っ先に述べるべきなのは、IUSA（ユサ社）です。日本の企業として第二次世界大戦後に初めての海外進出の例になったのは1955年、呉羽紡績がサンサルバドル市に繊維企業として工場を設け、以後成長を遂げてきました。呉羽紡績は後に東洋紡績に合併されましたが、IUSA社はエルサルバドル内戦の時代を経て現在もなおこの国の重要な企業です。

エルサルバドルの経済発展のために積極的にご尽力された平生三郎を称えた、「サブロー・ヒラオ」と名付けられた公園がサンサルバドルに設立されました。これは東洋紡からのエルサルバドルへの寄贈によって実現しました。公園内には数多くの植物が存在し、日本庭園もあります。自然博物館や児童のために遊具も設置されて、休日のレジャーや子どもた



写真6：Parque Saburo Hirao「サブロー・ヒラオ」公園

ちの遠足も行われていて、エルサルバドルと日本の友好関係の象徴的な施設となっています。

実は、エルサルバドルと日本の関係においても一つ触れたいのは1963年から1977年まで7回にわたって行われていた日本の大学生による中米視察団です。とくに第1回目は一般の人の海外渡航が許される前に特別に認められた画期的な旅でした。日本航空が初めてメキシコ市に乗り入れたチャーター直行便で慶応義塾大学と早稲田大学の学生が100名余、サンサルバドルの国立大学やIUSA社等も訪れました。この旅はNHKが取材しテレビニュースで放送したほどで、羽田国際空港で出発前の記念撮影の写真には大きく『日本-エルサルバドル親善視察団』と書かれています。

2015年のエルサルバドルと日本の国交樹立80周年記念のために、秋篠宮真子内親王がエルサルバドルをご訪問されました。サンサルバドル市UCA大学で日本語学習されている学生たちとの交流会にご参加され、同じくUCA大学で国際協力機構(JICA)の指導による耐震の実験施設をも視察された際には、防災教育や減災の工事の恩恵を受けた方々も直接真子様へ感謝の言葉を述べました。真子様はメトロポリタン大聖堂もご訪問されて、モンセニョールのマウソレオに献花されました。

世界で評価されているコーヒー

エルサルバドルのコーヒーは、ほどよい酸味と香りでも有名です。日本にもたくさん輸入されています。数年前からサンサルバドル市内でいろいろなコーヒー専門店がオープンしています。もちろん、チェーン店ではなく味と品質にこだわったお店で、これ

はよい変化だと思えます。と申すのも、かつてエルサルバドルの一番よい豆はすべて輸出に回されてエルサルバドル人は味わえませんでした。今やサンサルバドルにあるコーヒーの店はお薦めスポットになっています。日本でコーヒー店にも行かれる機会がありましたら、ぜひエルサルバドルのコーヒーを注文されることをお勧めしたいです。

サンサルバドル発展の課題

現在世界中で問題になっている新型コロナウイルス感染問題に対抗するために、日本からの円借款の災害復旧スタンド・バイ資金によって急ピッチで進んでいるプロジェクトがあります。ラテンアメリカでも最大級の病院が建設中です。数多くの患者の受け入れが可能な施設の整備によって、たくさんのエルサルバドル人の命が救われることにつながる重要なプロジェクトです。

近年に多く発生する水害や地震から市民や町を守るために必要な防災教育とインフラの強化などへの取り組みは先ず必要でしょう。この分野で日本との関係においてサンサルバドル市だけではなく全国的に様々な成果がありました。これからも両国の友好関係のさらなるステージを期待しています。

サンサルバドル市の市街がますます拡大してきて、現在は自動車の数が増えて交通渋滞が毎日のように起きるようになりました。そこで解決のために登場するかも知れないのは、サンサルバドル市に合うような人々が快適に移動出来るクリーンな新交通システムの整備で、その実現をとっても楽しみにしています。

(Martha Lidia Zelayandia Cisneros 駐日エルサルバドル共和国大使)



写真7：Centro Comercial Multiplaza 新しいショッピングセンター